

事項	<p>水稻出穂後の畦畔等の草刈りは斑点米カメムシ類の薬剤防除後に行うとよい</p>		
ねらい	<p>畦畔の草刈りは斑点米カメムシ類の被害軽減のため有効であるが、水稻出穂後に行うと かえってカメムシ類を水田に追いたて被害を増やすことになるため、出穂後の草刈りは控 えるよう指導されている。出穂後の草刈り開始可能な時期を確認するため、被害晩限を調 査したところ、斑点米被害は収穫期後も起こることが明らかとなった。 このことから草刈りは防除後に行うことが適当と推察されたので、防除対策上の参考に 供する。</p>		
指導 参考 内容	<p>1 斑点米カメムシ類による加害晩限 (1) 斑点米カメムシ類の加害による斑点米発生率は穂揃20～30日頃がもっとも高く、そ の後概ね10日毎に半減していく傾向がある。 (2) 無防除でカメムシの発生量が多い場合、収穫適期を過ぎても被害が出る可能性があ るが、適切に防除を行うことで斑点米混入率を減らすことができる。</p> <p>2 加害晩限から推察される斑点米発生リスクが少ない水稻出穂後の草刈り時期 (1) カメムシ類の発生源である畦畔や休耕田の草刈りは、草刈り場所周辺の水田でのネオ ニコチノイド系またはフェニルピラゾール系殺虫剤の散布後1週間以内、もしくは散 布直前を目処に行う。また、散布剤が合成ピレスロイド系あるいは有機リン系殺虫剤 の場合は、2回散布のうちの初回散布後すみやかに行う。 (2) 斑点米被害は水稻の登熟に伴い減少することから、無防除ほ場等で出穂後に草刈り を行う場合は、できるだけ収穫直前に行う。 (3) あらかじめ畦畔や休耕田にカメムシ防除剤を散布した場合は、草刈りしても問題は ない。</p>		
期待される効果	<p>適切な草刈りにより斑点米カメムシ類の被害軽減が図られる。</p>		
利用上の注意事項	<p>1 斑点米カメムシ類の被害軽減のための草刈りは、広範囲で行うほど効果が高い。 2 斑点米カメムシ類は、畦畔のイネ科雑草の他、水田内のイネ科やカヤツリグサ科の雑 草でも増殖するので、畦畔の草刈りと併せて、水稻の出穂期以降、水田内でこれら雑草 が繁茂しないよう管理する必要がある。</p>		
問い合わせ先 (電話番号)	農林総合研究所 病虫部 (0172-52-4314)	対象地域	県下全域
発表文献等	平成24、25年度 試験成績概要集 (農林総合研究所)		

【根拠となった主要な試験結果】

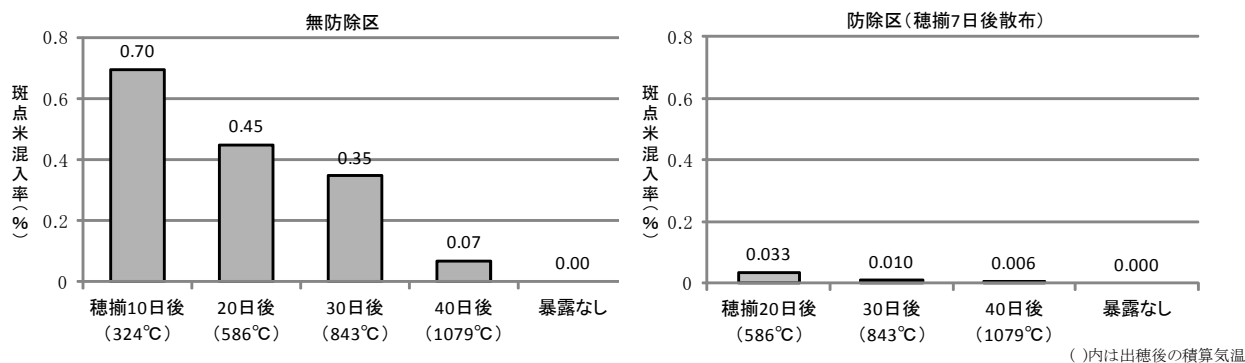


図1 「つがるロマン」における暴露期間別の斑点米混入率 (平成24年 青森農林総研)

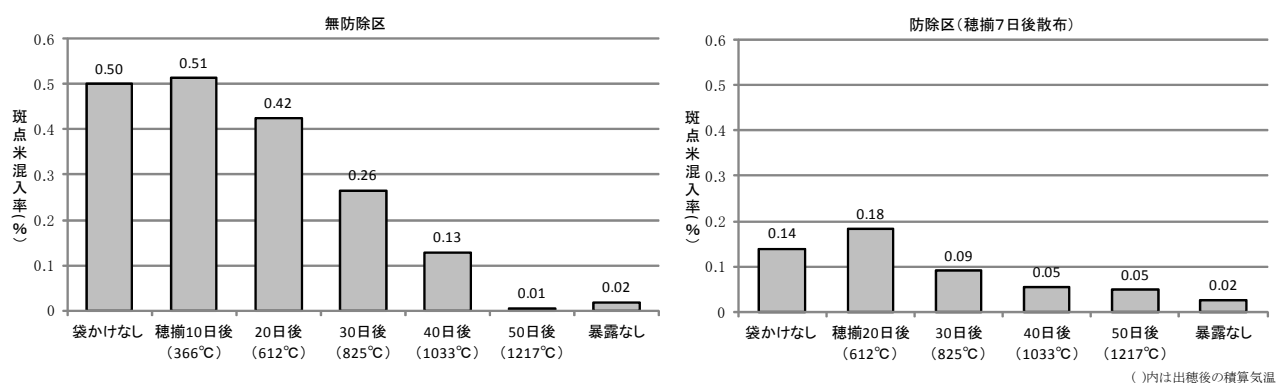


図2 「まっしぐら」における暴露期間別の斑点米混入率 (平成25年 青森農林総研)

- (注) 1 殺虫剤散布：ジノテフラン液剤 1000倍液140L/10a相当を背負い式動力噴霧器を用いて防除区に散布
 2 処理・調査方法：穂をカメムシの加害から保護するため、穂揃後すぐに、1株から5穂を選び袋をかぶせた。その後、カメムシ類に加害されるよう、各時期に除袋した。穂揃60日後、処理穂を全て回収・玄米に調整し、全粒を対象に実体顕微鏡下で斑点米の混入を調査した。各時期あたり約40袋分の穂を調査し、袋をかけない穂は穂揃後にビニタイで穂を軽く束ねた。なお、畦畔の草刈りにより水田内にカメムシが移動した状態を作りだすため、穂揃10、20、30日後の除袋後にアカヒゲホソミドリカスミカメ成虫50頭をそれぞれの区の中央部分で放虫した。
 3 暴露なし (収穫時まで袋をかけたまま) の穂でも被害が見られるが、袋かけ処理前の被害と考えられる。